

教育実践

山田神社仮社殿奉納 —東日本大震災被災地への支援のかたち—

熊本県立球磨工業高等学校 建築科 教諭 松葉 英星

1. はじめに

期 日：平成24年2月24日～28日

場 所：福島県相馬市・南相馬市

八沢浦干拓総鎮守 山田神社

(所在地：相馬市蒲庭字孫目)

参加者：志岐八幡宮司 宮崎國忠氏

青井阿蘇神社宮司 福川義文氏

球磨工業高校職員

校長 山田史郎 ほか3人

伝統建築専攻科1年生(当時) 5人

本校野球部3年生(当時) 2人

2. 出発までの経緯

2011年3月11日に発生した東日本大震災の津波で流失した山田神社の仮社殿として、球磨工業高校伝統建築コースの卒業生が平成6年度から7年度にかけて制作した祠を奉納することになった。

きっかけは平成23年11月、熊本県苓北町志

岐八幡宮司の宮崎國忠氏(現熊本県神社庁庁長)から青井阿蘇神社を通して、本校に展示してある祠を東日本大震災の被災地へ贈ることができないだろうかと相談を受けたことである。宮崎宮司は震災発生直後から3ヵ月間ボランティアとして被災地に入り、被災された方々の支援に当たられてきた。その中で、津波で多くの神社が流失した現状を憂い、仮社殿の奉納という形で支援できたらという思いを強く持たれたのである。宮崎宮司からの相談を受けて、本校の玄関脇に展示していた1基の祠を贈ろうという話が決まった。この祠は、前述したように、平成6年度から平成7年度にかけて本校伝統建築コースの先輩達が制作したものである。また、神社には鳥居が不可欠であるから伝統建築専攻科の1年生で鳥居を制作して一緒に奉納することとし、高校生が実習で制作していた灯籠も併せて贈ることにした。汚れていた銅板葺きの屋根を整備するなどして青井阿蘇神社に仮置きしていただき、参拝者からのご支援も仰ぐことに





なった。

他にも高校生としてできることはないかと、苦しい学校生活を送っている福島工業高校に野球の道具を贈ろうという企画にも取り組んだ。福島第一原発の近くにあつて、校舎が使えず4箇所のサテライト校に分かれて学校生活を送っている小高（おだか）工業高校へ本校から野球のボールとバットを贈ることになった。この話を受けて、熊本県高校野球連盟からも公式戦で使った試合球46ダースと一緒に届けるよう、ご支援をいただいた。

その他にも人吉市民からの支援物資を持参することになり、祠や鳥居と一緒に2400食のバックご飯とたくさんの野菜などを大型トラックで運搬していただいた。私たちは熊本から福島まで宮崎宮司のマイクロバスに乗り、フェリーと高速道路の旅である。決して楽な旅ではないが、思い出に残る旅となった。

3. 福島での印象

福島県に入ると、立入規制が敷かれた大館村では、街灯だけが灯る人気のない町の異様な姿に怖さを感じた。相馬市では交差点の脇に流されたままの大型漁船に驚いたものである。それでも宿泊先の民宿に入ると、山田神社の関係者の皆さんが多く集まっておられ歓迎を受けた。被災から1年が経とうとしていながら、多くの制約を受けたままの生活が続いている。また、大切なご家族を亡くされた方もいらっしゃる。そんな辛い日々の中に、私たちの訪問を歓迎し



てくださる皆様の暖かい思いに胸が熱くなった。

4. 設置作業

翌26日は早朝に宿を出て、設置現場に赴きトラックの到着を待った。高台になっている敷地からは、津波に襲われた田地が一望できるが、津波の傷跡は雪に覆い隠されていた。到着したトラックから現地の方々も一緒になって支援物資や祠をトラックから運んでいただいた。

仮社殿の基礎は氏子の皆様に前もって築いてもらっていたので、地元の方々に仮社殿の据え付けをお願いして、私たちは鳥居の設置にかかった。鳥居の据え付けに1時間ほど要したが、こうして地元の皆さんと一緒に作業を行い、仮社殿と鳥居を無事に納めることができた。

祠と鳥居の設置の後、厳かに神事が執り行われた。福島県神社庁の方を始めとする地域の皆様方が集まり「当地に仮社殿を鎮座することで心の拠り所とすることができる」と感謝のお言葉をいただき、鳥居制作の苦労やバスによる長旅の苦労も吹き飛んだ気がしたものである。





5. 小高工業高校野球部との交流

神事が済み、その足で小高工業高校野球部との交歓会場に向かったが、車中から見る景色は震災の爪跡を如実に示していた。津波によって無残な姿になった住宅に驚き、住宅の基礎だけが並ぶ様子や積み上げられた瓦礫の山に呆然となったものである。また鎮守の森に設置された仮社殿らしき祠が祀ってあるのも目にして、心の拠り所を必要としている方々の思いを強く感じた。報道を通して知る情報と、実際に自分で感じることの違いを実感した。

福島第一原発から20km圏内への立入制限を敷かれたすぐ外にあるレストランで、熊本から



持参したボールとバットを小高工高の野球部に贈り、お返しにと小高工高のユニフォームをいただいた。短い時間の交流だったが、同じスポーツに頑張る者同士で打ち解けるのも早く、若者の素晴らしさを強く感じた。授業や部活動にも多くの障害があると思うが、いつの日か両校がグラウンドで会えることを祈念している。

交流会の後、そのまま帰途についたが、特別なお計らいで、私たち一同は東京赤坂の乃木神社に宿泊させていただいた。さらに翌日は伊勢の神宮に参堂する機会を得た。参拝の後、内宮神楽殿に招かれて、今回の仮社殿の奉納に対して、神宮から「お札」と「神饌」を頂戴するという榮譽をにうこととなった。

6. 山田神社のその後

私たちが祠を寄贈したということから、2年ぶりに例祭が催され、各方面から山田神社へさまざまなご奉仕がなされている。

- 1 「東大阪女性経営者研究会」様より、御神体として直径約45cmの銅鏡（福岡県平原遺跡出土の内行花文鏡レプリカ：「上田合金」



様制作)を奉納。

- 2 東京の藁細工専門店「(株)縄忠」首代憲孝様から注連縄の奉納。
- 3 「ハートマーク・ビューイングプロジェクト」(東京芸術大学教授 日比野克彦様)より神社幕と飾り幕の奉納。
- 4 東京のダンスユニット「しでかすおともだち」(小林由佳様, 服部晴子様)による巫女舞の奉納。

例祭の後では、東京在住の画家「はと(本名 秦景子)」様から鳥居に絵を描かせてもらえないかとのお話があり、身退けられた氏子47柱と干拓工事時犠牲者11柱、合わせて58羽の鳥の絵を描かれた。この鳥居の絵を基に、奈良でネットショップを展開する「野庵」様の発案で制作された「ぼっぼ手拭い」を持って、南相馬で宿泊させていただいた「翠の里」の小倉様が本校を訪ねて来られた。小倉様からは後日、リンゴをたくさん送っていただいたので、お礼にと専攻科で照明器具を作ってお送りした。また、平成25年度に入ってから南相馬でお世話になった森宮司様をはじめとする皆様、本校を訪問してくださった。わずか一日の滞在にも関わらず、こうして今でも福島の皆様と「繋がる」ことができたことに篤く感謝したい。

本校に対しては、卒業生の方からお手紙やメールで励ましの言葉をいただいた。多くの方から、費用の足しにと寄付金を送っていただいた。また、福岡市の「九州ヘルメット工業所」岡橋太郎様から本校建築科宛にヘルメットの寄

贈を受け、大切にに使わせていただいている。お世話になった皆様に、この場をお借りして御礼を申し上げたい。

7. これからの取組

現在、もう1基の祠を青井阿蘇神社に預かっていただいている。これは熊本市横手町に祀ってあった、民生委員の父と称される「林市蔵」ゆかりの祠で、管理されていた岩永様から本校での教材にと寄贈を受けたものである。

平成24年度の高校生の課題研究の教材として解体修理を済ませ、東日本大震災の被災地へ贈ることになっている。送り先は小高市の神社を予定しているが、生活インフラが整備されていない状況で、どこに設置すべきか検討中である。

今回の山田神社仮社殿の奉納を通して、私たちの小さな力をきっかけに、大きな動きを生むことを経験した。私たちにできることは限られているが、「被災地の方々に少しでもお役に立てれば」という思いを胸に、今も「ものづくり」に取り組んでいる。

